

「見沼田圃」再々考

「流域の水ネットワーク」保全を目的とする田圃保全活動。そのためにはどこの田でも良いのですが、身近に、慣れ親しんだ見沼田圃がありました。

見沼田圃はさいたま新都心に接し、都市と宮農地帯の間でバッファー機能を果たしています。それだけでも保全の価値はあるのですが、見沼田圃を貴重な財産とするに値する意味を考えてみました。

見沼には縄文時代草創期からの記憶があります。縄文時代は定住して人間的な歴史を始めた時代です。でも自然と共存共生し、循環や多様性を大事にして生きていたので、一万年続けることができました。

日本人が食材に「旬」を大切にするのも、森を大事に思つのも、オノマトペを多用するのも、縄文一万年の記憶があるからです。

そして縄文人は「願い」を託す土偶をつくりました。見沼の縄文人も土偶をつくり、稲栽培を始めると、願いの場に大宮氷川神社・氷川女体神社・中山神社を置いたようです。三社は見沼の宗教文化となって今も大事にされています。

この見沼の縄文メッセージが聞こえる地に、見沼田圃があります。



2017年6月4日、水のフォルム市民田んぼで田植。
右奥は、農閑期に管理する斜面・平地林。首都圏30kmの地で、田とヤマが循環する里地・里山の再生・保全。

縄文時代の見沼

見沼田圃の前身「見沼溜井」、その前身の「見沼」の歴史は縄文時代に遡ります。

まず埼玉平野の成り立ちから説明します。地球が寒冷化した洪積世(約一六〇万～一百万年前)も終わり頃の約一〇万年前、河川が山から運んだ土砂が堆積し、「洪積台地」ができました。その洪積台地を約二万年前をピークに河川が浸食し、現大宮台地の東方(現中川低地)と西方(現荒川低地)に大きな谷をつくりました。

沖積世(約二万年前)、縄文時代)になると、地球規模の温暖化で氷河が溶け、約七千年前をピークに東京湾の汽水域が群馬県板倉辺りまで進み(縄文海進)、その後の冷涼化で現東京湾まで退きます(海退)。その過程で海底の谷が埋まり、沼沢地が残されました。

そこは地形区分上最も低い軟弱地盤。沖積世にできたので「沖積低地」と言い、河川が乱流するので「河川氾濫原」とも呼ばれます。

見沼も同様に、大宮台地に降る雨が集まって川になり、永い時間をかけて台地を刻み、谷をつくり、そこが縄文海進で海になり、今度は小海退を繰り返しながら広大な沼沢地を残しました。そこがいつしか「見沼」と呼ばれるようになりました。

縄文時代のはじめ

縄文時代は、新石器時代でかつ灌漑稲作と鉄器がない時代。遊動的な生活から脱し、定住して大きなムラをつくりましたので、旧石器時代にはなかった土器や磨製石斧など、生活道具をつくりました。

その最初の草創期前葉(約二万二〇〇〇年前)、見沼はまだ海拔マイナス一〇〇メートル以下の谷で、小河川が刻み残した台地が樹枝状に周囲を囲んでいました。その台地の縁で、現在分かっている縄文時代最古のムラ跡が、さいたま市緑区にある「えんぎ山遺跡」です。

次に古いムラ跡が、大宮氷川神社近くにある草創期後葉(約一万年)の「寿能泥炭層遺跡」。草創期末葉(約九五〇〇～九〇〇〇年前)になると、東京湾が内陸に入り込み、見沼は海拔マイナス四〇メートルくらい。同市緑区の氷川女体神社周囲に「松木遺跡」に代表されるこの頃のムラが数多く見つかっています。当時の人の暮らしの痕跡を伝える土器や石器がたくさん出土しました。

見沼も海になった頃

九〇〇〇年前頃から海水面が急に高くなり、七〇〇〇年前頃には現在の海水面より五メートルくらい高くなります。大宮台地東方の現中川低地では、東京湾の海進が群馬県板倉辺りまで進みましました。しかし西方の現荒川低地の海進は川越辺りまで。当時ここを流れていた荒川を入れた利

根川の流量が多かったためでしょう。

しかも遡上した海水の上部を利根川が流れていた(汽水域)、川越から下流、戸田辺りまでの貝塚は、河川下流部や河口付近で採れるヤマトシジミが主体。そのことから、縄文海進時、戸田・板橋辺りが荒川低地の海岸線だった、ということになるそうです。

一方、この頃の見沼の貝塚は、ハイガイやマガキが主体。これは奥東京湾が入り込んだ岩槻や蓮田と同じ。縄文海進時、見沼は奥東京湾の海浜環境にあったと判断されています。

海が徐々に遠ざかる時期

前期前葉(約六〇〇〇年前)になると、海が退きはじめます。見沼の貝塚は、海辺のハイガイではなく汽水域のヤマトシジミ主体に変わります。前期中葉(約五七〇〇年前)になると、海が海拔三～五メートルで安定し、貝塚はハマグリやアサリが目立つようになり、土偶も出土します。前期末葉(約五二〇〇年前)には、再び冷涼化が進み小海退。中期(約五〇〇〇～四〇〇〇年前)には川口辺りまで海退。泥干潟は徐々に湖沼湿地帯になり、見沼では丸木舟が使われています。海進で海を知った見沼の人たちは海の干満差を利用して盛んに海とアクセスしたようです。

縄文晩期のムラ「馬場小室山遺跡」

現在、芝川がさいたま新都心辺りで南流から

東流に変わり、しばらく進んでまた南流に変わりますが、その直前の右岸側崖上に、縄文時代晩期(約三〇〇〇〜二四〇〇年前)のムラの様子を伝える「馬場小室山遺跡」が見つかりました。見沼も晩期にはすでに海ではなく沼沢地帯。西日本ではこの晩期の頃、約二七〇〇年前に朝鮮半島から灌漑稲作が伝来し、田植を行っていた頃です。

馬場小室山遺跡には、中央に五〇〜六〇坪の大きな窪地があり、その周囲に大きな土饅頭のような土塚が五つ環状に並んでいます。このような「環堤土塚」は、芝川、綾瀬川、元荒川沿いに多く見られ、当時この辺りの定住作法だったようです。

一般に晩期以前の環状集落では、窪地から離れた外周に住宅をつくり、世代が代わるごとに窪地に向かって移り住みます。晩期には窪地内に入り込む例もあります。しかし馬場小室山遺跡に代表される環状集落は、窪地周囲を土塚で囲んでいます。窪地外周から内部に住宅を移動する作法で塚はできません。

馬場小室山遺跡の窪地はまだ未解明ですが、窪地周囲の住居で誰か亡くなると、そこは廃屋にして墓にし、隣に住居をつくる。そこでまた死者が出ると、以前墓にした所を埋め立てて移り住む。それを繰り返すうちに塚が形成されていった。

古墳のように一気に盛り土したのではなく、何世代もかけて用地が高くなっていくうちにで

きた塚、と考えられ、そこに定住への強い意志を見ることができそうです。

この定住を可能にした施設が、低湿地遺跡の寿能泥炭層遺跡に見られる通称「縄文沼」です。寿能遺跡からは晩期の漆塗り木製品など有機物の製品が出土し、沼の傍らには炊事や水晒の水場や舟着き場があり、複数のムラへ延びる丸木の本道がありました。

縄文沼は見沼周辺に集中的に見られ、馬場小室山遺跡の住人も縄文沼から丸木舟で東京湾まで漁労や採集に出たようです。

馬場小室山遺跡からは、たくさんの土器類が出土し、製塩土器もありました。さらに、土偶付土器や中空土偶、土版、人面文土器など、願いを叶えるための道具もあり、代々祖霊崇拜を行った痕跡も見られます。

なかでも人面文土器は完全な形で出土しました。派手な装飾も文様もない素朴な土器に象徴化様式化した顔が鋭いタッチで描かれています。

この人面文土器はその後、埼玉・群馬県各地で類似の土器が出土しました。その分布から、当時大宮台地の東方を流れていた思川・渡良瀬川の流域圏、西方を流れていた利根川・荒川の流域圏、入間川経由の分布圏等に分類され、その源流は渡良瀬川上流と考えられています。

見沼の縄文文化を継ぐ大宮氷川神社

東京湾との往還等、多方面と交流し、満ち足りていた馬場小室山遺跡の在地文化は、縄文時

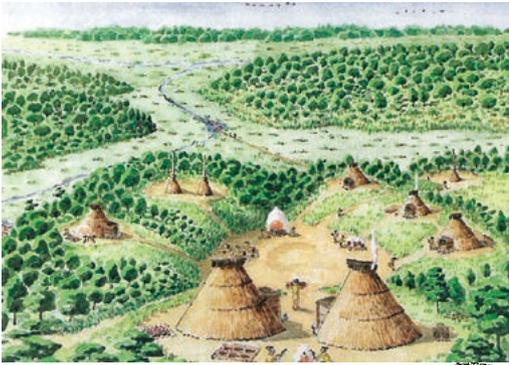
代後期後葉から晩期中葉まで続き、晩期末葉に姿を消します。晩期中葉はさらに冷涼化が進み、海退がピークに達し、寒さを逃れて移住してきた北関東やそれ以北の人たちと共存するうちに在地文化が消えてしまったのでしょうか。

あるいは、紀元前七〇〇〜六〇〇年頃、西日本で稲作が導入され、二〇〇〜三〇〇年遅れて東日本でも稲作が始まり、見沼でも稲の栽培を始めて、生活様式が激変したのかもしれませんが。いずれにしてもここで見沼の縄文時代は終わります。といって見沼の縄文人が一万年続けてきた縄文文化が即、消えてしまったわけではありません。

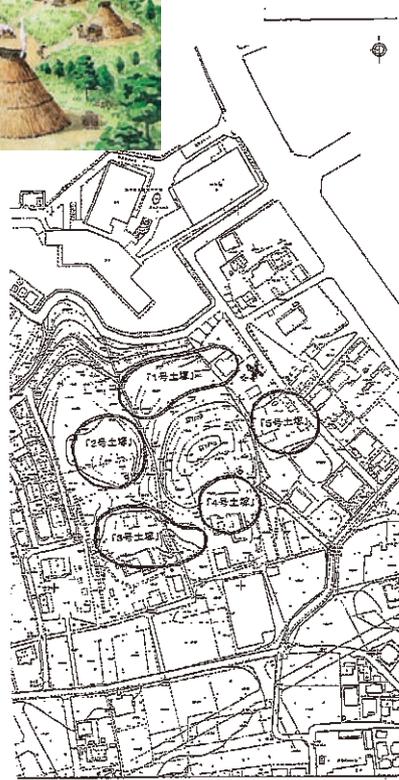
関東で縄文時代に創建され、九二七年編纂の『延喜式』神名帳に、官幣大社かつ靈験あらたかな名神を祭る「名神」の社格(名神大社)で載り、今なお現在地に引き継がれている神社は、鹿島神宮・香取神宮と、見沼の西岸台地上の大宮氷川神社だけ。大宮氷川社の創建は紀元前四七三年とされ、まさに見沼で稲の栽培が始まった頃です。

大宮氷川社に接して縄文沼の寿能遺跡があり、大宮氷川社の社殿周囲には馬場小室山遺跡に象徴される環堤土塚が残っています。当時常設の社殿はなく、この辺りで稲作を始めた人たちが、土塚で囲んだ窪地を聖域にし、見沼に鎮まる水神を迎えもてなして祭り、一年の安泰を願ったのでしょう。

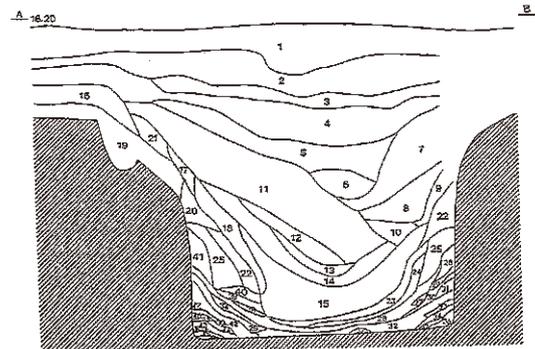
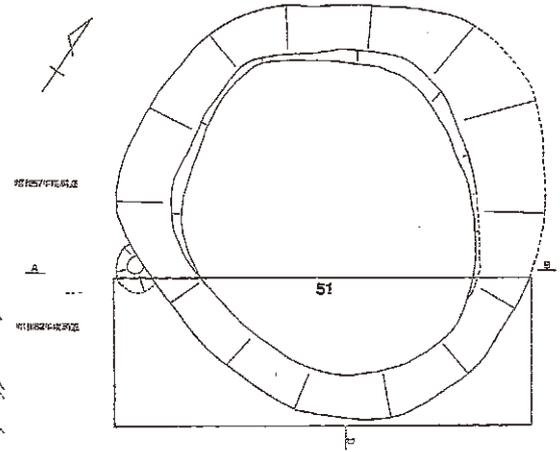
馬場小室山遺跡の「環堤土塚」



馬場小室山遺跡、ムラのイメージ図
井山紘文氏 画

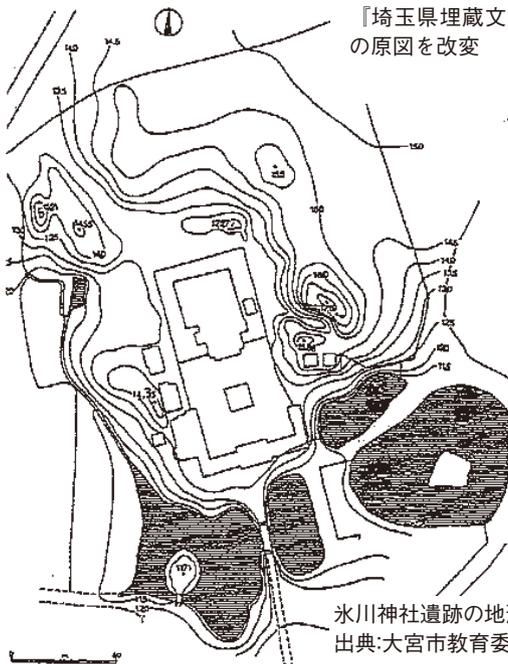


馬場小室山遺跡の環堤土塚 概念図
(×は人面文土器が出土した第51号土塚)
出典：埼玉県教育委員会 (1985)
『埼玉県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』
の原図を改変



上／馬場小室山遺跡第51号土塚平面図
下／馬場小室山遺跡第51号土塚断面図
出典：浦和市教育委員会 (1988)

『浦和市東部遺跡群発掘調査報告書 第9集』



氷川神社遺跡の地形測量図。社殿周囲を土塚が囲んでいる。
出典：大宮市教育委員会(1994)『氷川神社社叢調査報告』の原図を改変



ハート形の顔が愛らしい人面文土器／さいたま市立浦和博物館所蔵
右図出典：浦和市教育委員会ほか(1983)『浦和市東部遺跡群発掘
調査報告書 第3集』

★見沼の縄文文化についてのお問合せ

「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」事務局 (e-mail : cjt57750@rio.odn.ne.jp) 鈴木正博さんまで

弥生時代～中世の見沼

弥生時代中期後半の紀元前一世紀頃になると、見沼では御蔵山中遺跡(さいたま市見沼区御蔵)、大和田本村北遺跡(同見沼区大和田)などが見つかっています。

水辺のほとりで始めた稲栽培、見沼が暴風雨で暴れたらひとたまりもありません。見沼に鎮まる神が穏やかであってくれるよう願ったのでしょうか。第十代崇神天皇の時代(紀元前九七～二九年)、芝川が馬場小室山の入り江を過ぎて南流に変わる辺りの台地上に氷川女体神社(郷社)、氷川女体社と大宮氷川社を直線で結ぶ中間に中氷川神社(村社、現中山神社)が創建されています。

大宮氷川神社・中山社・氷川女体社の三社は冬至の太陽の動きがライン上に並んでいるそうです。この二至二分(夏至・冬至、春分・秋分)のレイラインは、鹿島神宮・香取神宮とも結ばれているようで、稲作に必要な暦を把握するための意図的な配置と考えられています。

弥生文化は荒川沿いで発展

見沼のほとりで稲の栽培を始めた人たちは、大宮氷川社と氷川女体社、中山社を創建し、見沼の宗教文化を残してくれました。しかし古墳は造りませんでした。

稲は貯蔵できます。すると大きな蔵を持つ者が

出てきて格差が生まれ、長が生まれ、隣のムラを収奪して、古墳に葬られるような長の長が出てきて、古墳時代を迎えます。

四世紀の頃になると、荒川沿いの桶川市川田谷に熊野神社古墳が築造されています。さらに荒川を遡ると、荒川新扇状地(熊谷扇状地)扇端部の熊谷・行田一带に、荒川流域最大規模の弥生遺跡があります。

この弥生遺跡に接して、西暦五〇〇年頃、ヤマト王権を象徴する大仙陵古墳(仁徳天皇陵)の四分の一の全長一二〇メートルの前方後円墳「稲荷山古墳」が出現し、埼玉(さいたま)政権の存在を伝える「埼玉古墳群」が築造されます。

埼玉平野西部の越辺川下流の台地上にも、比企政権の存在を伝える稲荷山古墳より少し小さい全長一五〇メートルの前方後円墳「野本將軍塚古墳」が築造され、埼玉政権と比企政権、荒川を挟んだの権力争いが推察されています。

一方、縄文時代一万年を生き、晩期に栄えた見沼には古墳がありません。沼の水だけでは稲作を發展させられなかったのでしょうか。しかしそれだけではなく、長を生まず、見沼の宗教文化を大事にし、みんなで助け合いながらの稲作を続けていたのだらうと思います。

見沼の宗教文化、荒川流域に広まる

古墳時代、それまで大宮台地西方を流れていた利根川と荒川は、大宮台地東方を往くようになります。大宮台地北部と群馬県の館林台地の



間が沈降して「加須低地」ができたからです。

以来、埼玉東部は思川・渡良瀬川・利根川・荒川、四カ河川が流れるまさに河川氾濫原になりました。

古代末から中世は、武士団が縄張り争いをした時代です。と言っても秀吉の刀狩までは兵農未分離。

いざ鎌倉」となれば鋤鎌を槍に持ち替えて馳せ参りましたが、普段は水を引き土地を開いた、墾田兼

武闘集団。武士団の働きで武蔵国の水田開発が進みました。

土地の開墾でまず必要なものが水。見沼の願いの場に始まる大宮氷川社は、荒川流域開拓の氏神

として各地に勧請されました(埼玉県内一六二社、東京都五九社)。江戸時代に天下祭として盛大な

祭りになった「川越祭」も、大宮氷川社を勧請した川越氷川社の例大祭です。(P9参照)

江戸時代からの見沼

関東に転封された家康は、天正十八(一五九〇)年八朔の吉日に江戸に入り、早速、家臣団の知行割を行いました。その原則は、家康の蔵人地(直轄領・天領)は江戸周辺、小知行の家臣は江戸からほぼ一夜泊まりの範囲、大知行の家臣はその外側に配置する。

家康の蔵人地は二二〇万石ですが、そこは思川・渡良瀬川を入れた利根川と荒川が乱流しながら越谷辺りで合流し、江戸湊に注ぐ広大な河川氾濫原。この沼沢地を美田に代える、その経営を家康は、伊奈忠次に託しました。

忠次は、江戸城と城下の建設と並行して、利根

川と荒川を引き離し、流路跡を用水路に整え、田に水を送り、田の排水を集めて再度、田に入れ

再度排水を集め、広大で平坦な低地ならではの用排兼用で水をつなぎ、江戸の海辺の村々に真水を

送る、壮大な「武蔵東部低地総合開発事業」に取り組みます。

この事業で利根川を銚子に送り出す事業を後に「利根川東遷」、荒川を大宮台地西方の入間川に付

替える事業を「荒川西遷」と呼び、この新流路が現在の利根川と荒川です。

一方、流路跡を整えた用排兼用の農業用水系が「見沼代用水」。後述する用水専用の農業用水路が「見

沼代用水」。日本の三大用水のうちの二つです。

「見沼溜井」と「見沼用水」の成立

利根川東遷は文禄元(一五九二)から六〇年余かけて、伊奈忠次、忠政、忠治、忠克(重勝)四代で取

り組みました。荒川西遷は、寛永六(一六二九)年に伊奈忠治が、熊谷扇状地に長堤を築いて荒川を

入間川筋に付替えました。そして同年忠治は、見沼下流の狭窄部に八丁堤を築き、見沼に溜井(平地

の溜池)を造成し、淵江領(足立区)方面に水を送る「見沼用水」を整備します。

当初はその水で賄えたのですが、沼の水では不足するようになり、見沼用水を利用する村々

の不満が高まります。その最中の承応三(一六五四)年、利根川東遷事業が完了します。

利根川洪水が銚子へ向かってくるとなれば、



見沼代用水は、江戸初期以来の見沼用水と江戸中期の開削水路を継いで延長80km。葛西用水とともに日本の3大用水に挙げられています。

途中の利根川に取水口を設置できます。洪水は遠ざけ、普段の利根川の水は取水口から旧流路跡に入れる、利根川流路跡利用の「葛西用水」完成に向けて次々と事業が進められます。

すると、見沼用水利用の村々も利根川の水を入れてほしいということになり、「見沼用水改良計画」を策定したのですが、水を引いてくる途中の村々の反対で頓挫します。

その夢が叶うのは江戸時代半ば、八代将軍吉宗の時。吉宗に紀州から呼び出された井沢弥惣兵衛が、利根川と見沼用水をつなぐ用水路を開削します。

途中、大昔の荒川流路だった星川を利用し、星川との分岐点には堰、現元荒川や綾瀬川との交差点所には「伏越」「懸渡井」を設置し、享保十二(一七二七)年八月からわずか半年で完成させました。

見沼用水に代わる用水なので「見沼代用水」と呼ばれ、葛西用水とともに今に引き継がれる大幹線用水路です。

ここで見沼田圃

利根川の水が見沼代用水の水源になって、不要になった見沼溜井は、願い出た農民に水田としての利用が許されました。見沼溜井が通称「見沼田圃」となるのはこの時。

でも農家は少しでも田を大きくしたいから農道などありません。他人の田を通って自分の田に行き耕作しました。農民に用排水の基盤整備などできませんから、田下駄や梯子、丸太を入れて、腰

まで泥水に浸かつての作業。一番厳しかったのは刈り取った稲を田舟に乗せ、それを台地上に運び出す作業だったそうです。

昭和十二(一九三七)年調べでは、見沼田圃が多くを占める旧浦和市の田の約九七割が、種籾に肥料をまぶして投げ入れる摘田でした。田植えもできない沼田だったということです。

現在のような見沼田圃の風景になったのは、全国的に土地改良事業が行われた昭和三十年代半ば。享保十三年に見沼代用水ができ、溜井が田圃になってもそこは溜井跡の沼田のまま。以来二三〇年もの間、見沼田圃は農民の手で泥水に浸かりながら維持されてきたのです。

高度経済成長期の見沼田圃

昭和三十三年(一九五八)年、狩野川台風で見沼田圃の排水河川・芝川が氾濫し、下流域にある川口市が駅前まで浸水します。当時の栗原瑤玉県知事は、上流域の治水の必要性から芝川の河川改修推進と見沼田んぼの農地転用の不許可を指示します。

当初は災害の記憶も新しく、米作の有用性もあり、宅地化の動きも緩慢で功を奏しました。しかしその後の高度経済成長期、宅地・工場用地・残土置き場等の立地が田圃に求められるようになり、農地転用抑制だけでは抗しきれなくなりました。

昭四十年栗原知事は、県が頑張ってきた見沼田圃の遊水地機能保全のための行政指導を「見沼田圃農地転用方針」の表題で明文化し、各委員会に諮り、即決します。それが「見沼三原則」です。行政が防

災という観点から土地利用という個人の私権を抑えたことは画期的なこと。政治に相談していたら実現しなかった、と高く評価されています。

並行して前述の土地改良事業で用排水施設や農道ができ、今見る見沼田圃になりました。

※見沼三原則概要 八丁堤と県道浦和岩槻線と加田屋川橋切橋に囲まれた今ある見沼田圃の緑地は維持する。浦和岩槻線以北は適正な計画と認められるものは開発を認める。芝川改修計画に支障があると認められる場合は農地の転用を認めない。等

今、田圃保全の担い手がない

やっとな水田耕作が可能になった見沼田圃ですが、近年は米価が下がり、首都圏三〇キロ圏ロドリにあつて利便性の高い所から米作の意欲、農地を維持する意欲を失う農家が増えました。

見沼田圃を守ってきた「見沼三原則」も平成七(一九九五)年に「田圃の保全・活用・創造の基本方針」に代わり、県の各種審査会に諮問してすべてOKであれば、開発可能になりました。しかし私権に弱い日本の都市計画、治水関係者が意見を聞かれて「ノー」と言っても、通ってしまいます。

その後始末に大型災害復旧費というツケが回わるザルのような状況で、見沼田圃は今、だいたい無残な姿になりました。それでもなんとか、首都近郊に貴重な水田地帯が残り、その保全が言われています。

縄文メッセージを聞きながらの田圃保全

そこで必ず言われることは公有地化です。しかし公有地化は初期投資も維持管理費も税金。開発圧力の高かった時期、一部でその取り組みもありましたが、見沼田圃すべての公有地化など無理です。現実には公有地化は先がなくなり、買手が付かない水田を抱えた農家は、公有地化への期待を引きずって営農意欲を失い、次代の担い手も不在で途方に暮れています。

しかし一方、水田には遊水池機能があり、ヒートアイランド現象を緩和し、稲のみならず周囲の生き物を育ててくれる。それが土や水に触れずに暮らす都市住民の癒しの場になります。この水田が有する多面的機能を楽しむのは都市です。見沼に残された田圃は都市住民もみんなで助けあって保全しよう、と水のフォルムは取り組んできました。

その作法は、下流の芝川・東京湾の富栄養化に配慮して無施肥・無農薬。地下資源利用を減らすため、ハサカケで天日干し。田に接する斜面・平地林の里山整備で土地の資源を循環利用。それを農家と都市住民が協力してやっています。

水の循環、物質の循環、人の循環、みんな循環しているので、猛禽類のチョウゲンボウを頂点とする生態系も豊かです。そして来年も無事でありますように、収穫物はまず氷川様に願いを込めて奉納。見沼の縄文メッセージは、市民の協力で引き継いでいきます。



2017 年秋は2度の台風で、見沼の“オロチ”が大暴れ。やっとなったハサカケが大崩壊。